

第10回研究大会報告

当学会の節目にあたる第10回研究大会は、下記の日程およびプログラムにしたがい、100人あまりの参加をもって盛大に行われました。この節目を契機として、学会誌のより一層の充実を図るために、今学会誌より大会での自由研究発表とシンポジウムを中心に概要を報告することいたします。

記

【大会日程】

- 期 日： 1991年2月10, 11日（日, 月曜日）
会 場： 筑波研修センター Ⅱ（0298）51-5152
日 程： 第一日目〔12:30～19:30〕自由研究発表, 講演, 総会, 懇親会
第二日目〔9:00～12:00〕シンポジウム

【大会プログラム】

I. 自由研究発表

第一分科会 司会者； 三野輪 敦（茗溪学園）木村 勝彦（筑波大学大学院博士課程）

- 1) 日本史における縄文時代学習への一試論－関東地方の沿岸文化における生業活動の評価－
洲崎 和宏（筑波大学大学院修士課程）
- 2) 高等学校「日本史」における考古学的内容の取扱いについて－貝塚の教材化－
金子貴紅葉（筑波大学大学院修士課程）
- 3) 国際的視野に立った農業学習のあり方について
中村恵利子（千葉県印旛村立六合小学校）
- 4) 「元朝治下の中国社会と民衆」－「世界史」における中国前近代史学習への試み－
金子 磨志（筑波大学大学院修士課程）
- 5) 生徒の実態に応じた教材化の工夫－地理的情報の付与と空間認知能力の変容について－
田村 和浩（茨城県立石下高等学校）

第二分科会 司会者； 谷田部玲生（お茶の水女子大学附属高等学校）溜池 善裕（筑波大学大学院博士課程）

- 1) 世界史教育における主題学習に関する一試論－鯨を教材として－
真柴 晶彦（筑波大学大学院修士課程）
- 2) 社会科における博物館・資料館の活用について－茨城県内を事例にして－
江口 勇治（筑波大学教育学系），川崎 誠司（筑波大学大学院博士課程），唐木 清志（筑波大学大学院博士課程）
- 3) 高等学校「倫理」における宗教理解について－F. D. E. シュライアーマッハーの『宗教論』を手がかりとして－
富永 貴稔（筑波大学大学院修士課程）
- 4) 昭和初期の公民教育についての研究（その1）－小学校修身科徳目の読みかえ実践事例を中心として－
田村 真広（筑波大学大学院博士課程）
- 5) アメリカの社会科教育における「日本」－中等教育における対日イメージ形成を中心として－
橋本 弓子（筑波大学大学院修士課程）

II. 講演

テーマ； 「地誌的研究の振興について」

講演者； 山本 正三（筑波大学地球科学系教授）

III. シンポジウム

テーマ； 社会の変化に社会科教育はどう対応するか—情報をめぐって—

提案者； 影山 雅之（茨城県勝田市立佐野中学校）

松本 康（埼玉県純真女子短期大学）

橋本 克己（東京都立白鷗高等学校）

山本 栄一（神奈川県立厚木商業高等学校）

司会者； 江口 勇治（筑波大学教育学系）

○自由研究発表概要

第一分科会では、前記5名の方の発表があった。以下、発表の骨子について言及する。なお、敬称は略す。洲崎の研究は従来の高等学校日本史で縄文時代を扱う際に生産用具と生産対象の関係のみが重視されていることから、特に貝塚を伴う集落遺跡を分析し、教材への導入を図ろうとしたものである。一方、金子（貴）は洲崎と同じく高等学校日本史での貝塚の教材化を図ったものであるが、教科書分析による呪術・習俗重視に対する批判による問題設定を行っている。そして貝塚を教材として使用することにより日常生活活動の比重を高めようとしたものである。中村は、半数以上が自宅が農業関係者でありながら、農業の抱える問題点に関して希薄な意識しかもっていない学級の児童に対して、農業の抱える問題点、特に日本の農業の外国との関わりにまで視野を広げさせることを目的として行った実験授業の結果を報告した。金子（磨）は研究は、前近代史の学習時間を短縮するための一つの方法として「社会構造」に注目し、特に中国を例として「大一統」の理論を援用することを提案した。田村は高校生の空間認知能力が地理的情報を与えることによってどのように変容するかということの調査を勤務校の生徒に対して行った。

本分科会は現職2名、大学院生3名による発表であったが、後者の発表は総じて実践研究が行いにくいという研究者の立場上、構想の段階のものであった。そのため、欲を言えば、構想であっても、土台となる教材論、認識論についてのより一層の論及が望まれた。なぜなら、こうした考察抜きでは、構想自体が一般性を持ちにくくなるからである。その意味で、中村の発表は明確な問題意識に裏付けられており、説得力のあるものであった。また、田村の発表も認識研究に関わって、教育実践に対する効果を持つ、より一般性を持つ成果が見られた。

（文責：木村勝彦*）

第二分科会では、前記5件の発表があった。真柴は、世界史教育の現状が暗記に偏していること捉えた上で、主題学習をそのような現状を脱する手段の一つと位置付け、世界的な問題になっている捕鯨の問題をモデルとして提示した。江口らの発表は、博物館および郷土資料館の活用に関する調査をもとにしたものであった。それらの施設の活用は、今回告示された学習指導要領に示されており、発表もそういった事態を契機としてなされたものである。富永は、シュ

ライアーマッハーの『宗教論』を手がかりとして、宗教理解の方策を提言した。これは、従来の高等学校「倫理」が、倫理思想を抽出する教材として宗教を取り扱っていることに対するアンチテーゼであったと考えられる。田村は、これまで取り上げられる頻度の高かった浅草区富士尋常小学校の教育実践を、東京市小学校における自治教育および修身教育の実態への批判的改訂とのつながりで分析した。橋本は、アメリカの高校生における対日イメージの形成と社会科教育との関連を分析した。橋本によれば、日本を知ることで態度・行動・精神構造に関するステレオ・タイプが強まるという傾向にあるという。

本分科会は教官1名、院生4名による発表であったにも拘らず、実践に結びつくものが過半数をしめており、会員による現場実践への指向性の強さを知ることができるだろう。ただ、なぜそのような学習が必要であるかについて、児童・生徒の実態分析を含めた上で、理論的な根拠が明確に示されなかったことは、今後研究の深化がのぞまれるところである。

(文責：溜池善裕*)

○シンポジウム概要

前記テーマに関して、各氏は次の視点から提言し、参加者との活発な質疑応答がなされた。

1)情報化社会に対応する地理学習；世界とその諸地域の学習をめぐって(影山)、2)科目「世界史」における普遍的情報(山本)、3)コンピュータ時代において社会科教育が対応する課題(橋本)、4)「情報化社会」の公民的資質(松本)(発表順、敬称略)

影山は、中学校社会科の実態調査に基づいて情報化の志向を受け止めるために必要な「自ら学ぶ適切な課題学習」の推進を地理的分野で求めることを力説した。そして、そのための工夫として「世界とその諸地域の教材化」の視点や「情報化に対応する魅力ある教科書づくり」に言及した。山本は、「世界史の教科書は変わっていない」という前提にたって「情報の体系」として教科書に含まれた「普遍的価値を持つ情報」の再評価を強調した。このために、教科書や生徒の実態分析を行い「普遍的情報」の活用の仕方について言及した。橋本は、「情報活用能力の育成とコンピュータ」「情報モラルの育成とソフトウェア観」「コンピュータが社会科の教育方法と学習内容に与える課題」の諸観点から、高等学校でのコンピュータ利用の在り方について提案した。松本は、情報化社会の光と影にふれつつ社会科で問題となる「社会認識」と「公民的資質」の今後の在り方について論究を行った。そして、情報に対する個人の解釈能力の重要性と情報化された環境のなかでの主体性ある市民の育成の必要を力説した。

各提案者の日頃の研究・実践に基づく発表に関して、とくにフロアーからはさらに具体化した内容の提起を求められたと思われる。情報をめぐる諸相は、最終的には個人の問題として帰着する。その意味では、情報やそのシステムに捕らわれながらも、情報をくだけ自己のうちに取り込んでいく努力のためにどうしているのか、システムを具体的にどのように活かしているのか、といった類の発表が少なかったように思われる。このような視点は、「社会の中で、社会の中へ」子どもを育てていくべき社会科教育を考える、もっとも基本的なものではないだろうかと思う。

(文責：江口勇治*)

選挙制度の諸問題と有権者教育

阪上順夫*

上記テーマで1991年6月1日の例会において、同氏より次のような内容の講演がありました。なお、この内容の整理については、事務局（江口）で行ったことをお断りします。

1. 現行選挙制度改革について

選挙制度改革（公職選挙法の改正）は、政治改革の柱となるべきであり、衆議院に小選挙区比例代表並立制が自民党決定により導入されつつある状況に対して、幅広い議論が展開されるべきであるとする。少なくとも、鳩山内閣と田中内閣時代に選挙制度改革に関して同様の提案がなされたが、両方とも失敗に終わり、選挙制度改革は容易にできなかった経緯がある。もし、かりに自民党案に基づき改正が行われた場合、「自民党の圧倒的勝利」といった試算もあり、「野党は壊滅的打撃を受けるだろう」という予想もあって、本来ならもう少し改革に関して議論が盛り上がるべきではないかと思う。しかしながら、1) 国民の政治的無関心（保守化傾向）2) 労働組合や学生の力の低下 3) マスコミの反対キャンペーン不足 4) 院内、院外での野党体制の崩壊 5) 小選挙区と比例区で重複立候補ができる、といった理由から、それほど改革の是非についての論議が盛り上がっていない状況である。なお、個人的には今回の改正案は、①後援会の組織の強い自民党にかなり有利 ②地盤の固定化 ③かかりすぎる選挙費用（奄美群島特別区の例）、等から「選挙改革ではなく、選挙改悪である」と考えている。

2. 有権者教育について

有権者教育の現状は必ずしも望ましい状況にあるとは言い難い。特に、女子大生詐欺投票事件等に見られるように、「一票の意義」に対する国民の意識低下は、民主政治の根幹に関わる問題であり、参政権に関する歴史的な重みを積極的に学校は教えていく必要がある。このために、（1）議会政治・選挙の歴史的意義を踏まえた学習 （2）民主政治では、棄権は国民の重大な権利の放棄であるという政治意識に基づく学習、を社会科教育のなかで明確に位置付けていくことが大切である。参政権については、「高学歴者に棄権率が多い」といったアメリカでの研究もあり、自覚した教育を教師が展開しなければ「棄権志向」を「投票志向」に変えていくことはできないのではないだろうか。有権者教育の改善では、たとえば最善の人ではなく自分の考えにより近い人を選挙を通して選択しているのだといった「BestよりBetterを」という視点や「投票した候補者は必ず当選しなければならない」といった意識を捨てることが大切であるという視点の導入により、多様な工夫が可能になるのではないだろうか。

* 東京学芸大学

「政治・経済」における政治的分野の授業展開例

平 岡 可奈之*

上記テーマで1991年6月1日の例会において、同氏より実践報告がありました。次の内容は、氏が「会報」No.37に寄稿したものを再録しました。

本報告では、以下の三点について提案を行った。

1. 時事問題を教材とした授業展開例

生徒は、中学校・公民的分野で基本的な内容はかなり把握している。しかし、社会科は暗記科目であるという意識が強く、興味・関心が薄い。したがって、社会科は自分たちが生きている社会を学ぶものであり、理解するものであるという認識をもたせることが、授業を行う上で第一の課題である。そのような点から、時事問題を教材として使用することは重要であり、問題解決型の学習を行うことができる。1年生では、授業前に教師の方から簡単に「最近の話題」として触れる。2年生では、生徒自身が調べてきて10分程度発表する。3年生では、時事問題の発表に1時間とり、その問題に対して、質疑応答、議論をしていく。(授業の詳細については、当日の資料を参照して頂きたい。)

2. 政治経済教育における問題点

①時事問題を導入に使用しているが、理解しなければならない教科内容との一致が難しい。(高校1年)②自分自身で時事問題を調べ、それに関連してさまざまな基本事項を知るわけであるが、断片的な知識が多く、整理されていない。(高2)③現代社会を理解するためには、地理・歴史的な基本事項が把握されていなければならないが、実際にはほとんどされていない。したがって授業の中で近代史の学習をしなければならない。やはり、系統的な学習において、地理・歴史的な基本事項が理解されていなければ、問題解決的な学習を展開することは難しい。(高1～3)

3. 今後の方向性

政治経済に興味をもち、社会科の基本事項が整理されている生徒には、問題解決的な学習が展開できる。時事問題を調べるにしても、基本的な語句、内容が理解できているのでさらに突っ込んで調べようとする。そこで、地理・歴史的内容も自分自身で調べて総合的な理解につながる。したがって、基本的知識の理解と把握において、はじめは興味・関心を高める教材化(時事問題教材の精選)と系統的な学習を並行して行う必要があると思われる。

以上の点を報告したが、生徒自身が興味・関心をもち、調べ、「社会認識」を深めていくような授業展開をさらに考えて行きたいと思っている。

* 桐陰学園高等学校

〈研究会報告〉

地理教育の研究領域

朝 倉 隆太郎*

上記のテーマで1991年10月26日の例会において、同氏より次のような講演がありました。以下の概要は、事務局（田村）によるものであることをお断りします。

1. 地理教育の目標

新学習指導要領にみる「地歴科地理」の目標で共通しているのは、地理的な見方や考え方を培うことである。こうした地理教育の目標については、戦後社会科の歴史をふまえて理解すべきである。さらに、昭和26年版学習指導要領の「人文地理の特殊目標」にある「7. 地理的観察力・判断力・思考力を養うこと」とか、「8. 種々の地理的な書物や紀行文などを愛読したり、旅行の際に科学的観察を行う習慣を養うこと」などは、今日でも学ぶべきところが多い。

2. 地理的な見方・考え方

地理的な見方・考え方については、昭和53年版の『中学校指導書 社会編』に示されている。すなわち、7. 地域の特色を他地域との比較・関連においてとらえること、4. 地域の人々の生活に関する諸事象の性格や意味を、地方的特殊性と一般的共通性の観点に立ってとらえること、ウ. 地域やそこに住む人の生活に関する諸事象の特色を生み出した地理的な諸条件について考えること、エ. 日本や世界における大小様々な地域的まとまりを考えるとともに、それらの地域間の相互依存関係や競合関係について考えること、オ. 自然及び社会的条件と人間との関係について考えること、カ. 地域の変容に気付かせ、その動向や意味について考えること、である。これらの背景には、ウーマン（①天体としての地球、②丸い地球を平らな紙の上へ、③地球をつくる岩圏・水圏・気圏、④地域的差異と類似性、⑤地域についての認識、⑥資源は文化的に規定されるものであること、⑦選択者としての人間、⑧地域間の相互作用、⑨絶えざる変化）やスタインハウザー（①グローバリズム、②差異、③地理的位置、④相互関係、⑤変容、⑥文化地域）などの地理の基本概念が参照されている。

3. 社会科授業の構成からみた研究領域

「教材」を媒介として、「児童・生徒」が「目標」を達成しようと努力するのが社会科の授業である。「素材」から「教材化」への不可欠の条件は、目標と児童・生徒の発達段階である。教材の種類と「学習指導過程」や「学習形態」との関係や「評価」などは重要な研究領域である。

4. 研究の方法

教育の実践的研究が正しい筋道と適切な広がりの中で首尾一貫して行われるためには、「いかに」だけではなく、「何か」という問いを欠いてはならない。社会科教育の論文において採られる研究方法としては、理論的方法、歴史的方法、調査的方法、実験的方法、比較的方法の五つをあげることができる。そして、現場教師の教育研究に何よりも大切なことは「観察」である。

「観察」とは、子ども一人ひとりを見つめることである。私は、高校教師で人文地理を担当した時代に、「評価記録用紙」を作って「観察」結果を記録し教育研究へのヒントとした。参考にさせていただければ幸いである（『現代社会科教育実践講座』第1巻<1991>を参照のこと）。

* 豊田短期大学

国際理解教育の実践 —クロスカルチュラルトークの取組み—

三野輪 敦*

上記テーマで1991年10月26日の例会において、同氏より実践報告がありました。次の内容は、氏が「会報」N0.38 に寄稿したものを再録しました。

茗溪学園では設立以来、学校の教育目標の重要な柱の一つとして国際理解教育に力をいれてきた。クロスカルチュラルトークはその中でも学年の生徒全員が参加し、多くの教科が学際的に協力しておこなわれるという点で意義の大きな取組みである。クロスカルチュラルトーク（以下CCTと略す）は中学3年を対象に研究学園都市に住むJICA（国際協力事業団）の研修員の方々を招待しておこなう交流会のことである。生徒は数名ずつのグループにわかれゲストをかこんでディスカッションをおこなう。その際の共通語はすべて英語が使われる。CCT全体の準備と質問項目の指導は英語科と国際教育部がおこなう。しかし、この行事は単に英語の学習にとどまらず、近隣諸国とくに発展途上国との相互協力を深めることを目標にしており、そのための事前学習が重視されている。この分野では社会科、芸術科が担当することになる。

CCTの事前学習を担当していて目標としていることは、人権尊重の意識と異文化への寛容と理解の態度の育成である。人権は近代西洋中心に考えがちであるが、環境権や発展の権利も視野にいれた、生態系のうらづけのある人権意識を育成する必要がある。簡単に言えば世界のさまざまな地域でそれぞれの生活様式で生活している人々があり、西洋を基準に考えることはないこと。すべての人々がそれぞれの生き方で幸福になる権利があることを理解させる必要がある。本校の生徒もやはり西洋中心の意識が強くCCTは発展途上国理解の絶好の機会である。

11月3日におこなった特別講義ではOHPを使用し、まず北極を中心にした世界地図を見せて世界の見方の多様性に気づかせ、人工、GNPを面積にうつした世界地図をつかって南北問題を説明する導入とした。またアジアのイスラム、ヒンドゥー、仏教の寺院やアジアのさまざまな文字をOHPでみせ多様性を強調するとともに、民族の分布と国境の違いをアジア、アフリカでみせ植民地化の過程と現在の発展途上国のかかえる困難さについて解説した。まだ世界について十分学習していない中3が対象のため興味、関心をひくことが中心の特別講義となった。

CCTは11月9日（土）におこなわれ、今年はスーダン、タイ、西サモア、ドミニカ、フィリピン、インド、バングラデッシュ、メキシコ、アルゼンチン、シリア、ヨルダンから15名のゲストをむかえることができた。

* 茗溪学園